【特集】

皆さんと共にこれからも 700号

広報おうらは今月号で

広報おうらが今月号で700号を迎えました。広報おうらの前身である邑楽村報は昭和32年（1957）に創刊しました。その後、昭和38年9月10日に発行された第17号から広報おうらへ名称変更。どんな時代でも、広報おうらは町の情報を発信し続けてきました。700号まで発行できたのは、間違いなく読んでくれる皆さんのおかげです。これからも町からの一方通行にせず、町民の皆さんが主役の広報紙づくりを心掛けていきます。そして、広報おうら700号特集では、皆さんと共に歩んだ歴史を振り返り、広報おうらができるまでを知ってもらう企画を考えました。

広報おうらの発行日

広報おうらは、毎月1日に発行。1日が土日祝日の場合は、直前の平日になります。発行日の朝、印刷業者が梱包された広報紙を町役場に届け、各行政区ごとに仕分けを行います。仕分けが終わると、区長さんのお宅や区民館にお届け。その後、区長さんや班長さんを通じて各家庭に配布されます。

広報おうらの届け先

各家庭への配布数は約9千5百部（令和6年12月現在）です。その他に、各社会教育施設や関係各所に届けられます。

広報おうらのページ構成

広報おうらは基本的に、24ページから32ページで構成されていて、フルカラーと2色刷りに分かれています。24ページ構成の際のページ割付例を紹介します。

前半（表紙～5ページ）は、フルカラーで、特集や発行される月に最も伝えたい情報などを紹介。

中盤（6～17ページ）からは2色刷り。町の旬な情報をお伝えする「町政HOT NEWS」。町で行われるイベントや役立つ情報などを掲載する「情報広場」。町教育委員会からのお知らせやスポーツ大会結果、教室・講座情報がまとめられている「JOY」が続きます。

後半（18ページ～裏表紙）から、再度フルカラー。町で行われたイベントや教室など、さまざまな話題をカメラで追いかける「PHOTO PALETTE」。皆さんから寄せられたひとことや情報、クイズ、文芸、さまざまな年代の町民を紹介する「みんなの広場」。

そして、広報紙の顔ともいえる表紙と裏表紙で広報おうらは構成されています。

皆さんに聞きました

広報おうらのどこが好き？

このページでは、広報おうらのどんなところが好きかさまざまな世代の人に聞いてみました。

横溝 紘希くん
あかりちゃん・優子さん
（埼玉県さいたま市在住）

町外でも読める広報紙

結婚してから埼玉県へ引っ越して十数年が経ちます。町外に住んでいても広報おうらを読みたいので、「ふるさと通信」を利用しています。好きなところは全体的に凝っているところ。まず表紙を見ると読みたくなり、子どもたちも気がつくと読んでいます。広報おうらは家族で楽しめる広報紙です。

青木 啓太さん（谷中蛭沼・11区）

幅広い世代に向けて

老若男女がバランス良く掲載されているところです。どこかの世代に偏ることがなく、全世代にフォーカスを当てているからこそ、愛されていると思います。あと、地域のバランスも取ってますよね。これからもみんなが読みたくなる広報紙を楽しみにしています。

橋本 みなみさん（下中野・1区）

子どもの情報が見つかる

子どもに関する情報がしっかり掲載されているところです。ふれあい広場があることも広報紙を読んで知りました。それからは、広報紙が届くと子どものイベント情報をくまなく探すようになりました。これからも、たくさんの情報発信をお願いします。

塚原 奈津子さん（光善寺・15区）

時代に合わせた情報発信

時代に合わせて新しいことを取り入れているところ。広報おうらはどんどん新しいことを取り入れていて、読んでいて飽きません。QRからたくさんの写真が見られたり、LINEで広報紙が届いたりと。次はどんな新しいことをするのか毎月の楽しみです。

佐藤 りおさん（石打・20区）

今の姿が見られる

友達の成長を見られるところ。中高一貫校に進学した私にとって、地元の友達の今の姿を見ることができる広報おうら。今月はどこにいるかなと毎月探しています。体育祭の写真が掲載されたときは、同窓会のような気分でした。これからも、子どもたちの様子を掲載してください。

新井 三世さん（店高原・28区）

こだわっている表紙

表紙の写真にこだわっているところです。毎月、多くのイベントなどの取材へ行って、たくさん写真を撮っている中から厳選しているんだなと感じます。表紙の写真が素晴らしいと、今月はどんな内容かなと気になって読みたくなります。

大塚 昭夫さん
みち子さん（前谷東原・2区）

何度も読み返したくなる

まず見るのはJOYのインフォメーション。次はどの教室に参加しようかと、夫婦で予定を立てながら考えます。そのあと写真をざっと見て、眼鏡を替えてから文章を読み始めます。内容は毎月読み応えがあり、何度も読み返します。

記念号を振り返ろう

節目を彩ったあの人

広報おうら700号を迎えるまでに、100号刻みにすると6度の節目がありました。このコーナーでは、節目の広報紙に掲載された人たちなどに、当時の思い出や広報おうらについて語ってもらいました。また、節目の各広報紙は町のホームページから読むことができます。

町ホームページ

広報おうら100号（昭和50年2月号）

成人式典に出席

吉田 佳予子さん
（十三坊塚・6区）

100号に掲載されてから、50年も経ったのですね。何を書いたかさえ忘れていましたが、改めて記事を見て、あのときに話したことは常に心の片隅にあり、批判するだけでなく、できることはやるという気持ちは持ち続けてきたように思います。

私は、仕事で広報担当をしていた時期もあり、広報活動の大切さと大変さはよく分かっています。長年の『広報おうら』の担当者たちの努力が、今の読みやすく伝わる、そして楽しみな『広報おうら』になっていると思います。

成人式典に出席した際の写真

広報おうら200号（昭和58年5月号）

町議会議員選挙に当選

荒井 直次さん
（古家十軒・30区）

三期目の町議会議員選挙の結果を見ると、今でも胸が熱くなります。私以外にも立候補者が多く、どうなるか分かりませんでした。なんとか当選できたのは、応援してくれた人たちのおかげです。感謝してもしきれません。少しでも町を良くすることができたかな。

議会だよりの編集をしていたことがあり、編集作業がどれだけ大変か理解しているつもりです。それでも、広報おうらを楽しみにしてる人がいるため、これからも広報紙づくりを頑張ってください。

町議会議員に当選した際の写真

広報おうら300号（平成3年9月号）

記念号にコメント

菅原 邦子さん
（十三坊塚・6区）

私たちの日々の暮らしに密着した大切な広報おうら。町の人々の暮らしがよく伝わってきました。読むことが好きな私は、毎月楽しみにしています。300号の記念号へ感想を問われ、当時の思いをいろいろと述べさせていただきました。実際に掲載されたときの恥ずかしい思いは、今でも鮮明に覚えております。

広報おうらは、写真とみだしの使い方が上手だと思います。そのため、内容が視覚的に入ってきます。これからも分かりやすい紙面作りを楽しみにしています。

記念号にコメントをした際の写真

広報おうら400号（平成12年1月号）

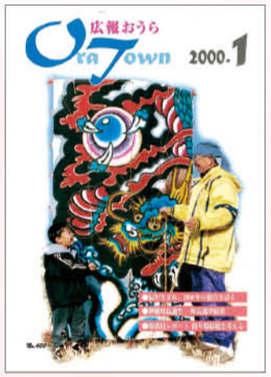
がんばってますに登場

陶芸家を50年続けています。振り返ってみると、家事・育児・陶芸教室などで忙しい時期もありました。そんなときでも、陶芸には無理をしてでも向き合うことができたのは、心から陶芸が好きだから。やりたいことのために、やらなきゃいけないことを頑張れたのだと思います。

広報おうらのがんばってますなどで、紹介される人の記事を読むとその人の思いがよく伝わります。いろんな人が載っていて、みんな違ってみんないい。これからも多くの人を紹介してください。

「がんばってます」No.119の写真

阿部 未希こさん
（明野・34区）



広報おうら500号（平成20年5月号）

入園式の写真がまさか

入園式のときに広報担当の人が来ていたので、広報紙に載るかなと少し期待していました。翌月の広報紙に載っていて、家族みんなで笑顔に。議会だよりの表紙になっていたのも驚きました。

広報紙に写真が載ると思い出に残ります。いつになっても、あのとき、広報紙に載ったんだよねって会話が生まれます。これからも、思い出に残る写真を掲載してください。

広報紙（写真上）と議会だよりに掲載された写真

針谷 豊さん
華さん
さい子さん
（明野・34区）

広報おうら600号（平成28年9月号）

子ども議会で質問

当時、町のイベントが少なく感じ、町が盛り上がりにかけていると思い、子ども議会で質問。今は、鶉古城まつりやオーランドさんのお誕生日会など新規イベントも増え、盛り上がっていると感じます。

実は以前、広報おうらで連載していた『あしもとに故郷』という記事は私の曾祖父が著者なんです。その連載の中でも、町の歴史などの記事が記憶に残っています。また町の歴史などを扱った記事を読んでみたいです。

子ども議会で質問をしたときの写真

厚川 颯太さん
（寺中・26区）

全国広報コンクール『写真の部』入選号

広報おうら579号（平成26年12月号）

私の写真が入選しました

保育園の行事で、ぶどう狩りを楽しんでいたときの写真。写真を撮っている人がいた記憶はうっすらと残っています。私の写真が表紙になることは母から聞いていましたが、自分が表紙で使われている広報紙を見たときは、うれしくて飛び跳ねていた記憶があります。

その後、私の写真が全国広報コンクールで邑楽町初となる入選をしたと知って、自分のことのように誇らしくなりました。今後も、読んだ人を喜ばせることができる広報紙をつくってください。

当時の状況を再現

土田 玲奈さん
（前瀬戸宿・8区）

広報おうらができるまで

毎月発行される広報おうらが、どのようにつくられているか知っていますか。このページでは、広報おうらが完成するまでの過程を紹介します。

①ページ割付

広報おうらは、印刷・製本以外の工程を広報担当者が行っています。広報紙に掲載される情報は役場の各部署や各種団体などから寄せられます。寄せられた情報の中から、どんな特集をするか、情報をどのページに掲載するか、誰に取材するかなどを決めています。

②取材

広報紙に掲載する、しないに関わらず、町の教室や講座、イベントなど土日祝日や夜でも取材に行きます。写真を撮ったり、参加した人へコメントをもらったり、広報紙の紙面づくりの材料を集めに行きます(ほぼ毎日)。

③編集

取材や各部署から寄せられた情報を精査して分かりやすく、伝わるようにまとめます。

④校正

編集後、出来上がった原稿を各部署に確認してもらいます。必要な場合はこの作業を複数回行って原稿を仕上げます。

⑤入稿

広報紙に掲載する写真や原稿データを印刷会社に渡します。そのためには、この日までに原稿を仕上げる必要があるので、正に追い込み時期です。

▶入稿時に使うフラッシュメモリ

⑥初稿

入稿したデータが印刷されて戻ってきます。写真の色合いや誤字脱字、日付などに間違いがないかの確認をするために、広報担当者が読み合わせを行います。

⑦最終校正

広報担当者が印刷会社に行って編集を行います。読み合わせの結果、間違っていたところの手直しやレイアウトの最終調整を行います。その後、印刷会社も原稿のチェックを行います。

⑧刷出確認

広報担当者が印刷会社に行って、発行される広報紙の色合いの確認や、印刷のズレがないかチェックします。

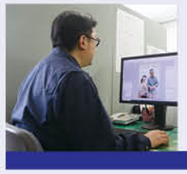
⑨印刷・製本

刷出確認を終え、印刷・製本されると広報おうらの完成。そしてすぐに、翌月号の広報紙づくりが始まります……。

Special Interview

印刷・製本を担う会社へインタビュー

広報おうらは本年度、山進社印刷株式会社(埼玉県本庄市)で印刷・製本されています。ここではその他にも、写真の加工なども行っています。実際に仕事をしている人たちに広報おうらについて聞いてみました。



制作に携わる2人に聞く 広報おうらってどう思う?

熱意に応えたい想いで

大塚 直樹さん

広報おうらの写真の加工などを行っています。広報おうらの仕事に携わるようになってから、いろいろな要望を受けることが増えたので、それまでより技術を身につけられました。それは、邑楽町から細かい指示や難しいことを依頼されるから(笑)。初めは要望に応えられないこともあり歯がゆい思いをしていました。それでも、見応えのある写真や企画を見ていると広報に対する熱意を感じて、その熱意に応えるために、さまざまな技術を身につけることができました。今後もどんな要望が来るのか楽しみです。

こだわりの色合いを追求

榊原 栄治さん

広報おうらの印刷などを行っています。当社は邑楽町以外の印刷物も請け負っていますが、刷出確認に来るのは邑楽町だけです。それだけ、広報紙に力を入れていることがよく伝わります。だからこそ、広報おうらが求める色合いを追求し、印刷された紙面を見て、どの色味が必要か考えます。また、写真やデザインなど至る所にこだわりを感じます。そのため、心掛けていることは、広報担当者がモニターで見ている色と実際に印刷されたときの色合いのズレをなくすこと。これからも、広報おうらの目指す色合いを追求します。

600号に見たこだわりのキーワード 未来

100号を刻むと「8年4カ月」の月日が流れます。
今から8年4カ月前、600号を担当した当時の広報担当者に話を聞きました。
取材は4時間超えのロングインタビューに(汗)。ここでは一部のみを掲載します。

左:なんちゃってカメラマン 深澤 大樹(現健康づくり課係長)
右:笑顔の伝道師 本澤 和樹(現福祉介護課主任)

――600号を記念号として発行しましたね。

深澤 平成28年2月号(593号)を編集していたときに「600」の数字が頭をよぎりました。もしかして広報おうらの一つの区切りを自分たちが担当として迎えるんじゃないか、と。

本澤 それからは早かったです。メモリアル企画を考えたり、紙面構成をイメージしたり。考案期間は約1カ月。完成した企画書は12ページになりました。コンセプトは3つでしたね、深澤さん。

深澤 一つ目は「(600号を)知る」。二つ目は、広報紙に関わる楽しみと過去の広報紙に見る歴史を振り返りながら町への関心を育むという意図で「つなぐ」。三つ目が「未来を描く」。それは1号から600号までに59年の歴史があるということ。そして、企画考案当時は、時代の変化が大きく、未来を描きにくいと(私は)感じていました。だからこそ、邑楽町に生きる町民の息とともにその想いを広報紙というカタチにして、未来につなげていくことが大切だと考えました。

――メモリアルな企画やコーナーが目白押しですね。

本澤 普段の広報おうらのイメージを残しつつ、メモリアル感をあらゆるところに散りばめました。総ページ数40ページのフルカラー。600号の編集ができたあとは、もう何でもできる!と自信になったことを覚えています。

深澤 あれもこれもと欲張った感じは否めません。でも、できることはやっておかないと後悔する、と本澤さんが言うもので……。

本澤 私、言いましたっけ?

深澤 歴代広報おうらの全てを役場ロビーに展示した『ぱっく・とぅ・広報紙展』はメモリアル企画の肝。昔のアルバムをめくるのと同じような感覚を広報おうらで味わってほしくて企画しました。

ぱっく・とぅ・広報紙展(当時)

深澤 名前が「未来」さんの人に未来を語ってもらった『未来さんが描く未来』やLINEをオマージュした『未来MiRAiN』のコーナーは、シンボルタワー未来MiRAiがある邑楽の広報紙にしかできないコーナーだったと自負しています。

本澤 わが家のアイドルの成長を見る『わが家のアイドルの現在(いま)』は、成長したアイドルに会えただけでワクワクして取材がつい長引いて。

本澤 企業協賛のプレゼント企画も忘れてはいけません。協賛いただいた企業や事業所の皆さんのおかげで、たくさんの読者に喜んでいただけました。

深澤 歴代広報おうらの全てを役場ロビーに展示した『ぱっく・とぅ・広報紙展』はメモリアル企画の肝。昔のアルバムをめくるのと同じような感覚を広報おうらで味わってほしくて企画しました。

わが家のアイドルの現在(当時)

深澤・本澤 まぁ、この辺りの話は尽きません。

――600号のことで、お互いを褒め合ってください。

本澤 「重ねてきた記録…いま、600号。ここからまた未来へ」というタイトルそのままに、歴代広報紙をあしらった積み木を女の子が重ねる表紙のアイデアは、本当にすごかったです。今でも尊敬しています。

深澤 あら、うれしい(照。「もっと言って」)。

深澤 町民参加型をうたう広報おうらにあっては、町民インタビューや活動写真をたくさん載せることは必然。特に600号でも、たくさんの取材をしましたけど、本澤さんのフットワークはいつにも増して良かったよ。

本澤 あのときは体重落ちましたもの(笑。「終わったあと戻りましたけど」)。

――2人にとって、広報おうらとは?

本澤 町の歴史、時代の空気感や雰囲気、住む人たちの感情などがカタチになったいわば町の記録誌。「手に取れるからこそ伝わる温かみ」とともに、次世代にいつまでも伝え引き継がれていくものだと。

深澤 広報紙という情報媒体を使いながら町の一体感をつくる。出来事(思い出)を共有して振り返ることができる。これはすなわち「時間を越えたコミュニケーションの実現です!」って、本澤さんがよく言っていましたね。

本澤 私、言いましたっけ?

700号から また、未来へ――